

## 【第1部記念講演要旨】

私は、千葉県建築文化賞の選考委員を第1回から第6回まで務めた。この講演の依頼を受けたとき、もう15回を重ねたのかと懐かしく思っていた。

まず、千葉市・幕張ベイタウンの話から始めたい。私もマスタープランづくりに関与し、実際に街開きをして15年ほどたっているが、この何もなかった埋立地が建築を通して一つの文化を作り上げた象徴的な出来事と思っている。普通は都市計画から街を作っていくが、幕張ベイタウンは、建築の設計が先にあって、こういう建築物が建つにはどういう都市計画にするかを検討した当時では珍しい手法だった。千葉市立打瀬小学校（「打瀬小学校」）の設計をしたが、打瀬小学校の南側にあるパティオス6棟の集合住宅と、小学校と中学校だけが最初に建って、あとは原っぱの状態、この街が成功するかどうか、人が住んでくれるかどうかについて、6棟の集合住宅と一つの小学校、一つの中学校に焦点が当てられ、それが失敗するとこの街は成立しないという中で建築は重要な役割を持っていた。

街づくりのコンセプトとしては、郊外型団地計画ではなく、都心の街のような住居形式、つまりベットタウンに象徴される夜寝に帰る場所ではなくて、人がいきいきと仕事をしたり、食事をしたり、学んだり、休んだり、憩ったりという街・地域を作りたいという発想だった。垣根のない都市計画で沿道型住居を提案していたので、オープンで壁も塀もない小学校が生まれた。

この打瀬小学校は、日本建築学会賞とともに、千葉県建築文化賞も授賞している。当時、学校建築の設計は初めてだったが、いろいろな学校を見て回って、これは違うかも知れないとか、変わっていないとか感じたことを素直にこの打瀬小学校の中に埋め込んだ。今、打瀬小学校は多くの学校に影響を与えて、新しい形でひとつのオープン型学校の文化につながっていると思っている。外で学ぶという教室のあり方は、千葉の伸びやかな地域性や、海辺で育つ子どもたちに伸びやかな居場所を何とか作ってあげたいという意向を反映している。やはり文化は地域と関わっていて、この千葉では外の教室を生み出した。それが、いろいろなところに広がっているのではないかと思う。

その後、この打瀬小学校のおかげで、いろいろな地域で学校づくりをやらせていただく機会を得た。学校づくりというのは、まさにこれから世の中を担っ

ていく人たちを、社会に出す直前まで預かる巣のようなものであって、そこから旅だって行って、様々な文化に影響を与えていくという、建築が重要な役割を担っている施設だと思う。

ただそうはいっても、日常生活を営む場所であるから、非常に特別な場所というわけにはいかない。学校は普段着で行って、伸び伸びする場所であって、当たり前ということに自分で注意を払って、全力でやってきた。それは元を正すと、打瀬小学校を作ったときに学んだことである。

建築は非常に長い期間、そこに存在していく。今日、表彰された皆さん方の作品は、まだ出来て間もないものだと思うが、それが5年、10年、20年とそこに物語やドラマや様々な出来事を生んで行って、おそらくその地域の文化に貢献していくと思っている。

次に、打瀬小学校からスタートしたテーマが、どう全国に広がっているかお伝えしたいと思う。

これは福岡市立博多小学校の例である。打瀬小学校とは、条件が違う中でも同じことを実現しようと思った。道路の際まで建物を建てて、学校の中の様子が全部外から見えるようにしようとした。つまり学校が街の中から取り残されるのではなくて、ここで生活している子どもたちが街の中に伝わるようにしてあげた。それは打瀬小学校で学んだことを都市の中で実現している。

打瀬小学校で学んだものに、階段の部分を使った先生の授業がある。打瀬小学校では、子どもを階段に座らせて、その前で先生が授業をしている光景がよく見かけられた。これはうまく使っているなと思い、そこから「表現の舞台」といわれる階段状の教室を作った。大本は打瀬小学校の普通でちょっと広めの階段だったが、今、「表現の舞台」は固有名詞になっていて、全国のかんりの新設校では、いわゆる階段教室を作り、このスペースを大変よく使っている。

なぜ、そのように広がっているかというと、多くの人が見学にきている。そうするとかんりの教職員の人が私たちにも、こういうスペースがほしかったと言って、次の建物に反映されていく。

学校の場合は、施設を管理している人たちが、賞を授賞したことを誇りに思って、いろいろな人に、見せてあげている。そして次々にいい部分が普及していくことになる。それは造る側だけでなく、使う側も賞の授賞を契機に、建物のいいところを広げていく役割を担っている。打瀬小学校でも、施設がよくな

ると皆が通いたくなるのが自然で、今はこの地区のどこの学校も満杯になっている。本当にひとつのことがまわりに波及する影響度は大変大きい。元気な子どもたちの姿が街の中に見えてきて、自分たちも参加したいとか、子どもをそこに通わせたいとか、そういう力が働いている。

次は、音がすると隣の人への気配りを覚えることである。

打瀬小学校でもそうだが、音は非常に重要で、ナーバスになり音を切りたがる。音を切ると回りに迷惑をかけないので、思い切った活動ができるのだが、周りへの気配りを忘れる子どもたちを作ることになってしまう。そのことに対していろいろな対応をしているが、音が出るようなときは同じフロアで一斉に音を出すようにした。また、お話の時間のときは、ボランティアの人がお話をするので、静かにしてくれないとお話が聞こえない。そこで、この1時間はどのフロアもみんなお話の時間にしている。そういう使い手の側の工夫は、建物を上手に使っている一つの例と言える。

もう一つは建物の文化である、どの世界にも病院なら病院の文化とか、学校には学校の文化、役所には役所の文化があって使う側が望む形が決まっており、それを押えて建築は建てられていく。しかし、あるときその文化は少しおかしいのではないかと疑問に思ったときに、建築の側が何か仕掛けてあげると、その文化をもう一步進めてあげることができる。もっといい文化に変えてあげる力が建築にあるのではないかと私は思っている。したがって、今と同じものを造ればいいということではなくて、今の状態に何か足りないものがないとか、何か不自然ではないとか一歩ずつ進んでいくのだが、この博多小学校をやるときは、職員室は何をやる部屋なのだろうかという疑問があった。そこで逆転の発想で職員室をなくして、各フロアに教師コーナーを分散した。実はこの大本は打瀬小学校だった。打瀬小学校の初代の校長先生が教師コーナーをフリールームとして自由に使っていた。空教室がいっぱいあったということもあったのだが、それが非常によく使われていることを私たちは体験していた。その様子を、私たちが拝見して、教師は授業と授業の間には生徒のそばにいて準備をするのがよいということを学んで、それを最初のシステムとして学校に取り入れた。そのように、いろいろなものを作り直すことを、建築の側から仕掛けていくと、脈々と継がれてきた建物の文化に、少し新しい風を吹かせることができる。

また、ガラス越しの校長室を作ると、皆が困ると言う。ところが使い始めると、何で今までやらなかったのかとなる。校長室にいても皆の様子がよくわかる。壁があれば、自分から動かないと全くわからない。これだったら執務をしても皆の様子がわかる。このように、建築には、少し違った文化を入れることができる。

その後、いろいろな機会を得て、子どもたちが学校づくりに参加するチャンスを得た。これは最近できた富山の芝園小学校の例で壁を塗るという作業を子どもたちとやったものである。これは5年生がペンキを塗っている様子だが、みんなで図工室の壁を作ろうと、ペンキをカラフルに塗った。これからのものづくりには大切なことと思っている。そういうプロセスを経て学校をつくっていくと、地域の親御さんたちが子どもたちのために参加してくれるという地域の教育力は非常に大切だと思う。打瀬小学校はそういうことを最初から実践していた。子どもが少ないということもあったが、地域のいろいろな親御さんが学内で能力を発揮していることを見させていただいている。そういう人が参加しやすいようなラウンジも作ろうという発想もある。

あとは学校という決まりきったルールだけでなく、建築は豊かなルールを作ることができる。福井の中学校の図書室の例だが、私たちは市立図書館では、大きな「気積の空間」を作るのが普通なのだが、どうしても学校というと3クラス分の部屋ということに押し込まれていた。そうではなくて、やはり学ぶ場であるから、その中心に大きな空間があって、みんなが図書室の空気を感じられる空間を作ることに、建築がアイデアを出し実現したものの一つである。

これも地域性が違いだが、千葉で考えなくて済んでいたものが、福井にいくと、雪の中で生活している子どもたちにとって学校は何なのかということを考えなければならなくなる。雪国では昼間でも暗くならない学校を作るにはどうするかを考えなくてはならない。窓をつけても雪でふさがってしまうので、光が入らなくなり、通常の窓では何にも役に立たなくなる。そのため、よろい戸のように下に向かって窓があって、下からの明かりで室内を明るくする手法をとっている。

千葉でやれること、北の地域でやれること、南の地域でやれること、それぞれが本当に違う。富山では、こういう背景・風景の中で生活している子どもたちをどうして生き活きとさせるかということで、この学校では、パサージュと

いう屋根ありの空間を作った。冬場の環境では雪とか雨とか曇とかがあり、かつ日本海側は非常に暑いので、のびのびとして空間をつくって、打瀬小学校でもそうだが、外部でも楽しめるスペースを仕掛けると子どもたちは楽しく通ってくれる。たとえば、これは中学校のアトリウムだが、中学生ぐらいだと学年の差が厳しい。アトリウム空間では子どもたちの生活が、部活でもそうだが、この学校ではお互いがよく見られていて、大変仲のいい学校となっている。

最後に、今まで話したように、いろいろな学校があるが、本当に私たち建築に携わるものが一生懸命に造っていると、そこを使ってくれる子どもたちも、きれいにしようという心が育つと思う。学校を見学してくれる人たちに掃除の時間まで見てほしいと思っており、実際子どもたちが建物を大切にしてくれる姿を見て感動する。福井では1日に3回、5分間静かにするというをやっている。朝の5分間の読書と昼間の掃除の直前の5分間静かにして、そのときに次の掃除のことを考えて、5分後チャイムが鳴ると掃除を始める。静かに考える時間をちょっとだけ持つということをやっている、掃除の時間をすごく大切に考えている。

建築は30年ぐらいでドラスティックに変わるものだと思う。文化は100年、200年というが、すごく変わると思いながら、変えていく力が私たち建築にはあって、これからも元気に、変えていかなければならないと思っている。

千葉県建築文化賞の15年の歩みを見ると、受賞作品は非常に大きな建物から、いろいろある。小さな小学校の見捨てられた池に手を加え、20万円ぐらいできれいにしたことがあったが、見違えるように子どもたちの一番好きな場所にすることができた。

皆さんにはいろいろなチャンスがあると思うので、小さなことでも少しずつ手を加えていって、皆が豊かになれるような場所を作っていただけたらいいと思っている。今回、千葉県建築文化賞を授賞された皆さんが、これからも活動を続けて、いい文化を創ってほしいと心から願っている。